

幼稚園において楽しくきまりを身に付けるための指導法について

二階堂 年恵／合原 晶子

幼稚園は子どもが生まれて初めて社会生活をするところである。幼稚園の集団生活に必要なきまりを知り身に付けることは、幼稚園の大きな役割である。よって教師は子ども同士がより良く関わり合えるような活動や支援を考えなければならない。現在幼稚園においては、幼稚園教育要領に基づいて子どもたちの発達段階に応じて、きまりに関する教育が行われているが、今後は規範意識の育成をより具体的で実践的な学びとして取り入れていく必要があるだろう。

特に幼児期は、遊びの中から様々なことを学ぶので、幼児にとって遊びとは「学習」そのものである。本稿では、遊びを通して楽しくきまりを身に付ける指導法について考察する。

5歳児を1グループ4～5人に分け、かるた遊びをする中でまずは幼児たちが読み手を決めて遊びを進めていく。その中で生じたトラブルも幼児たち同士で解決させるようにする。振り返りの際、勝敗や順位だけでなく、幼児が遊びの中で味わった色々な気持ちについて言葉で表現出来るようにしておき、困ったり嫌な気持ちだったりした時の気持ちを2枚のカードで示しながら他の幼児に伝わるようにする。同時に周囲の幼児の気持ちも聞いて全員で共有する。互いの気持ちを理解した上でどのようにしたら良いか解決策を考え、場面ごとにルールを決める。その際相手を思いやる言動が出来ている幼児を教師はしっかり認め、他の幼児にも気付かせていく。その後再びかるた遊びをする。教師は幼児がルールを守っている場面を見つけしっかりと褒め、幼児にルールを守ることの気持ちよさを味わわせる。

幼児たちは遊びの中で、互いに自分の考えを出し合ううちに、様々な考え方があるということを知り、それを理解した上でその考え方を受け入れたり、自分とは異なる考えでも尊重したりしながら、さらにルールを確立するという規範意識の芽生えがなされることを可能にすることが出来るのである。この過程を通して、遊びのルールやトラブルの解決に対して協同して取り組むことの出来る力を育むことが可能になり、5歳児段階における規範意識の醸成といった点における役割は果たせるのではないかと考える。

1. はじめに

幼稚園は子どもが生まれて初めて社会生活をするところである。幼稚園の集団生活に必要なきまりを知り身に付けることは、幼稚園の大きな役割である。よって教師は子ども同士がより良く関わり合えるような活動や支援を考えなければならない。

幼稚園教育要領解説の第2章「ねらい及び内容」の人間関係の「内容の取扱い」の(5)では、「集団の生活を通して、幼児が人との関わりを深め、規範意識の芽生えが培われることを考慮し、幼児が教師との信頼関係に支えられて自己を発揮する中で、互いに思いを主張し、折り合いを付ける体験をし、きまりの必要性などに気



付き、自分の気持ちを調整する力が育つようにすること¹と示している。学校教育法においても第三章幼稚園の第二十三条の二で、「集団生活を通じて、喜んでこれに参加する態度を養うとともに家族や身近な人への信頼感を深め、自主、自律及び協同の精神並びに規範意識の芽生えを養うこと」と示している。

現在幼稚園においては、幼稚園教育要領に基づいて子どもたちの発達段階に応じて、きまりに関する教育が行われているが、今後は規範意識の育成をより具体的で実践的な学びを幼稚園段階でも取り入れていく必要があるだろう。

幼稚園教育要領解説によれば、「規範意識の芽生え」とは、「友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる²」ことと示している。

つまり、きまりは教師が言葉で伝えるより、子どもたちが友達と関わる中で少しずつ身につくものであり、教師は、子ども同士がより良く関わり合えるような活動や、必要に応じて子どもたちの間に入り、働きかけることが求められているのである。

ベネッセ教育総合研究所が行った調査研究結果によれば、就学前の子どもを持つ母親がわが子の通う幼稚園、或いは保育園にどのような役割を期待しているか調査したところ、最も多かったのが「集団生活のルールを教えてほしい」が第1位で、「子どもに友達つきあいが上手になるような働きかけをしてほしい」が第2位だった。このように幼稚園児、保育園児の母親の多くは園生活を通して子どもの社会性が育つことを期待しており、この傾向は直近の10年

間は変わっていないという³。

特に幼児期は、「遊び⁴」の中から様々なことを学ぶ。すなわち、幼児にとって「遊び」とは「学習」そのものなのである。人間形成の基礎を培う幼児期に「遊び」を中心とした生活を通して心身の発達を促すことが幼稚園教育⁵のねらいである。

本稿では、遊びを通して楽しくきまりを身に付ける指導法についての報告を行う。

2. 幼児期における規範意識の芽生えについて

平成20年度改訂の幼稚園教育要領の領域「人間関係」において「規範意識の芽生え」が加わり、幼児期における規範意識に関する研究は増加してきている。しかしながら、「規範意識の芽生え」とは何か、そのための教師の指導・支援はいかなるものなのか十分な議論はされてきていないと言えるのではないだろうか。

上杉氏によれば、「規範」とは、「基準」、「慣習」、「習慣」、「道徳」、「行動様式」、「法」、「ルール」、「きまり」等、多様な意味を含む概念であり、「慣習」や「習慣」のように無意識のうちに行動を規定するものと、「法」や「ルール」のように、明文化されて強く言動を規定する事柄が含まれている⁶と述べている。

つまり、「規範」とは、ある集団に属する人々によって支持されることが求められるもので、明確に示されるものから、暗示的に示されるものまで多様であることが分かる。例えば、幼稚園においては、「ルールやきまり(～すべきである・～すべきでない)」といった明示的なものから、「あいさつをしましょう・友達と仲良くしましょう」といった暗示的なものまであるといったことが考えられる。一般的に子どもの日常生活における「規範」は、「ルール」や「きまり」、「約束」といった表現で示されることが多い。例えば、「遊びの中で、スポーツ、ゲー



ムや遊びのルールの問題を通して・・・⁷や、「みんなと一緒に生活していくためには、守らなくてはならないいくつかのきまりや約束がある。」⁸と表現されていることである。また遊びにおける規範は、「鬼ごっこのきまり」というより、「鬼ごっこのルール」とも示している。

つまり、日常生活には「きまり」や「約束」が、遊びの場面には「ルール」が多く使用されている。「きまり」と「約束」については、「きまり」のみの場合や、「きまりや約束」と合わせて表記されている場合もあり、明確な区別はなされていない。

また幼稚園教育要領（平成30年改訂）に示している、「道徳性・規範意識の芽生え」についてであるが、「道徳性」と「規範意識」の双方が関連したものであること、特に幼児期においては、その双方の概念は明確に区別されてお

らず、併せて考えるもの⁹と述べられている。

一方で神長氏によれば、「道徳性の芽生え」を構成する要素に、「きまりを守る態度」や、「善悪の判断力」といった規範的内容を挙げている¹⁰。このように、道徳性と規範意識が併存するという見解と、道徳性の中に規範意識が含まれるものとする見解もあり、研究者の視点によって定義が異なっているのが現状である。しかし、いずれも、「道徳性の芽生え」と、「規範意識の芽生え」は、併存的な関係であることとして捉えられていることは明らかであると考えられる。

東京都教育委員会では、規範意識の芽生えに関する発達の道筋と、発達に応じた大人の関わりで大切にしたいことを明らかにしている。（表を参照）

（表） 規範意識の芽生えに関する発達の道筋、及び大人の関わり（3歳児～5歳児）

視 点	3歳児	4歳児	5歳児
	大人と一緒にきまりを守る体験を	相手の気持ちに触れる体験をたっぷり	みんなと一緒に生活することの楽しみを基に、自立に向けて応援を
きまりルールマナー等	<ul style="list-style-type: none"> 生活や遊びの中には、安全のためなどに必要なきまりがあることを知り、それを守ろうとする。 みんなで使う物があることが分かり、一緒に使おうとする。 遊具や用具の貸し借り、交代や順番待ちの際に、必要な言葉を使う。 	<ul style="list-style-type: none"> 同年齢の子どもと楽しく生活する中で、きまりの大切さに気付き、守ろうとする。 安全のために必要なきまりや行動の仕方が分かり、自分から行おうとする。 簡単なルールを守って遊ぶ楽しさを味わう。 	<ul style="list-style-type: none"> 同年齢の子どもと一緒に遊びを発展させる中で、自分たちで遊び方やきまりを作り出し、守って遊ぶ。 安全のために必要なきまりが分かり、遊びや生活の中で、危険なことを自分で判断する。



<p>大人の関わりで大切なこと</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ やってよいことと悪いことがあることをその都度知らせる。悪いことをした時には、どこが悪かったのかを伝え、きちんと叱る。 ・ 「貸して」等の言葉や交代、順番等のきまり等、子ども同士で活動する上で必要なことを伝え、大人と一緒に行動しながら、徐々に自分で出来るようにしていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ けんかの場面では、双方が相手の思いにも気付けるように大人が仲介する。その子どもの気持ちを受け止めて心を落ち着かせたり、その後どうしたらよいかを一緒に考えたりして、気持ちを切り替えて遊べるように支える。 ・ 子どもが自分で行おうとしている気持ちを尊重し、大人が先に指示したりせずに暖かく見守り、出来たことを共に喜ぶ。 ・ ルールがある遊びを大人も一緒にしながら、その楽しさや負ける悔しさなどを共に味わう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 遊びや友達関係がうまくいかない場面では、子どもが、様々な出来事や感情に向き合いながら乗り越えていけるように、一緒に考え支えていく。 ・ 自分で考えて判断し、発言したり行動したりする姿を認めていく。 ・ 日常の生活の中で、交通安全や地域社会のルールについて考える。
---------------------	---	---	---

(東京都教育委員会『きまりをまもるこころを育てるー幼児期の「規範意識の芽生え」の醸成指導資料ー』平成26年より筆者引用抜粋)

3. 指導について

本指導は、幼稚園5歳児を対象とし、幼稚園教育要領第2章第2節の2、人との関わりに関する領域「人間関係」に基づいた内容として位置付けている。

本指導では、きまりの意味を体験的に学び取ることを意図として、幼児たちが主体となるかるた遊びを取り入れた指導を構想した。指導するに当たっては、幼児主体の実践を行うため幼児たちに、自分たち自身で役割を決めさせたり、トラブルになった時には教師は、幼児たち自身で考えさせるような支援を行った。

また、幼児たちが自分の思いを伝えるためのカードを取り入れ、このカードを活用することで、互いの思いを主張させたり、折り合いを付けさせたりすることが出来るように工夫した。そして、遊びを通して体験的にルールの大切さに気づき、ルールに従うことで皆と楽しく遊ぶことが出来るといった、規範意識の素地を培う一助となることをねらいとした。

5歳児は、「他律から自律へ」、「身近な集団から広く社会へ」と変化しながら、社会的ルールが身についてくる時期であり、同じ目的を持った仲間と集団で行動することが多くなり、



遊びをより楽しむために自分たちでルールを作ったり、守ることの必要性を理解していく時期である。また、他の人の役に立つことを嬉しく思う等、集団の中の一人としての自覚も生まれてくる時期でもある。人の役に立つことや、人に喜んでもらうことで、意欲が高まり、自分たちが出来ることは話し合っ決めて出来る年齢である。

以上のことから、指導実施にあたっては、友だちと活動する中で、自らの思いを表現したり、時に考えをぶつけ合い互いの思いを主張し、調整しながら、ルールを幼児たちがどのように自分たちの中に取り込んでいくか、内なる規範となっていくのか、幼児たちの持てる能力や意欲を活かし、どのように指導に取り込んでいくかが重要である。

保育指導案

- 1 対象児 3年保育5歳児 男児15名 女児15名 計30名
- 2 時期 1月
- 3 活動名 かるた遊び
- 4 幼児の実態

小学校就学を控え基本的な生活習慣がほぼ確立し、自分のことは自分で出来る幼児が増えてくると共に、生活や遊びのルールを理解し、守ろうとする意識も育っている。また、友だちと一緒に目的のある遊びをしたりグループで課題をやり遂げたりすることに意欲が見られ、

そのために必要な「順番を守る」、「時間を守る」、「園内での生活のきまりを守る」等も確立しつつある様子が伺える。

反面、遊びのルールについては、「勝ちたい」、「獲得したい」、「一番になりたい」等の気持ちが強い幼児は、分かっているも我慢が出来ずルールが守れないために、トラブルの発生につながることもある。また自分の気持ちを通そうとするあまりに、周囲の友だちの気持ちになかなか気付くことができにくいという実態も見られる。

5 活動設定の理由

5歳児のこの時期は、文字や数に興味・関心が高まり自分の名前を読んだり書いたりすることが出来るようになり、環境を整えることで絵本を自分で読もうとしたり、数字と物との対応を理解したりすることが出来る。その中で「かるた」は、文字を覚え始めた幼児にとって興味を持ちやすい遊びであり、時期的にも正月遊びとして家庭や園で多く行う遊びである。

また、複数名で遊ぶのでルールを守ることが必然的に生じることから、幼児が面白さを味わうことが出来ると共に、ルールについて考えたり、友だちの気持ちに気付いたり出来る活動であると考えられる。

6 ねらいと内容

○かるた遊びを通して、ルールの必要性に気付き互いの気持ちを知って楽しく遊ぶ

- ・友だちと一緒に遊ぶ楽しさを味わう
- ・遊びの中でルールの大切さに気付き守ろうとする
- ・自分の思ったことを伝えたり相手の思っていることに気付いたりする



7 評価の観点と教師の手立て

評価の観点	教師の手立て
①トラブルを解決する中でルールの必要性やそれを守ることの大切さに気付いていたか	①幼児の主体性を大切にしながら、なぜトラブルになったのかを幼児同士で考えるように促し見守る
②自分の思いを伝えることや相手の思いを理解することができていたか	②言葉でのやりとりだけでなく絵カードを示すことで、相手の気持ちがより理解できるようにする

8 本時の活動

時間(分)	幼児の主な活動	指導上の留意点と発問	環境構成と準備物
15	1. かるた遊びをする ・ 4～5人のグループで集まる。 ・ 読み手を決める。 ・ かるたで遊ぶ。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 各自の思いが出しやすいように本時は予め決まっている生活グループでかるたをすることを伝える。 ・ 読み手の決め方は、各グループに任せるようにするが、なかなか決まらない場合は、教師が仲介しながらできるだけ幼児の話合いを尊重して決める。 ・ トラブルが起きた場合は見守り、子どもたち同士で解決できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1グループに1組のかるたを用意する。 ・ グループごとにござシートを広げて丸くなって座る。
グループごとにかかるた遊びを進める。			
10	2. かるた遊びについてみんなで振り返りをする。 ・ 楽しかったことや面白かったことを発表する。 ・ 友だちの思いを知ったり共感したりする。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 勝敗や順位だけでなく、遊びの中で味わった色々な気持ちについて言葉で表現できるようにしていく。 ・ 「にこにこウサギ」カードを示しながら、友だちの気持ちに気付かせていく。 	「にこにこウサギ」カード



<p>5</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・困ったことや嫌な気持ちだったことを発表する。例「お手付きをした」「同じ幼児ばかりが札をとった」「身を乗り出していた」等。 <p>3. 解決策を考える</p> <ul style="list-style-type: none"> ・場面ごとにルールを決める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・困ったり嫌な気持ちだったりした時の気持ちを2枚のカードを示しながら受けとめていくことで聞いている幼児にも友だちの気持ちが伝わるようにする。 ・特定の幼児の気持ちだけを聞くのではなく、必ず相手や周囲の幼児の気持ちも聞いて全員で共有する。 ・お互いの気持ちを理解した上で、どのようにしたら良いかを考えるように促す。 ・相手を思いやる言動ができる幼児をしっかりと認め他の幼児にも気付かせていく。 ・ルールを決め守ることで、みんなが「にこニコウサギ」になっていくことに気付かせていく。 	<p>「しくしくウサギ」「ぷんぷんウサギ」カード</p>
<p>10</p>	<p>4. もう一度かきた遊びをする。</p> <p>5. まとめをする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ルールを守っている場面を見つけしっかりと褒める。 ・トラブルになっている場面では、うさぎカードを見せながら今互いの心の中はどうなっているのかに気付かせ、ルールを再確認するように促す。 ・自分たちの考えを出してルールを決め遊ぶことができたことを認め評価する。 ・ルールを守ることの気持ち良さを味わわせる。 	



4. かるた遊びにおける指導の実際について

まず、5歳児のクラス30名を1グループ4~5人に分け、幼児たちで読み手を決めてもらいかるた遊びを進めていく。読み手の決め方は各グループに任せるが、なかなか決まらない場合は、教師が仲介しながら出来るだけ幼児の話し合いを尊重して決める。また、かるた遊びを進める中で生じたトラブルも幼児たち同士で解決させるようにする。

振り返りの際、勝敗や順位だけでなく、幼児が遊びの中で味わった色々な気持ちについて言葉で表現出来るようにしておく。楽しかったり、面白かったことを発表する際は、「にこにこウサギ」のカードを示し、友だちの思いを気付かせ共感させていく。

次に困ったり嫌な気持ちだったりした時の気持ち、例えば「お手付きをした」、「同じ人ばかりが札をとった」、「身を乗り出していた」を2枚のカード（「しくしくウサギ」「ぷんぷんウサギ」）で示しながら他の幼児に伝えるようにする。同時に周囲の幼児の気持ちも聞いて全員で共有する。

幼児たちは互いの気持ちを理解した上でどのようにしたら良いか教師は解決策を考えさせるように促し、場面ごとにルールを決めさせる。その際、相手を思いやる言動が出来ている幼児を教師はしっかり認め、他の幼児にも気付かせていく。ルールを決め守ることで皆が「にこにこウサギ」になっていくことに気付かせる。

その後再びかるた遊びをする。教師は幼児がルールを守っている場面を見つけしっかりと褒め、もし、トラブルになっている場面ではウサギカードを見せながら、今互いの心の中はどのようになっているのかに気付かせ、ルールを再確認するように促す。

最後は、教師が幼児たちの考えを出してルールを決め、結果的に楽しく遊ぶことが出来たこ

とを認め評価し、幼児にルールを守ることの気持ちよさを味わわせる。

このかるた遊びをすることで重要なことは、ルールを守ることが目的になってしまわないことである。遊びは幼児たちにとって最も基本的な活動であり、幼児の様々な側面の発達を助長するものである。幼児は遊びの中で人生において必要な様々な能力の練習をし、遊びの中で培われた能力を日常生活の中で実践している。また、実践されることによってより頑強になった能力は、再び遊びの中へ戻り、より発展した遊びを幼児にさせることになる¹¹からである。

このように幼児の発達にとって遊びは欠かせないものであるが、幼児の発達にとって本当に適切な遊びとは何か、そしてその遊びを補填するためにどのような環境や大人の支援が必要なのか、また何より大人が幼児と一緒に様々な遊びを楽しみ、遊びを通して子どもの能力を伸ばしていくことが一番重要なことである。

また教師の介入の仕方であるが、方法は二つある。一つは、押しつけずに幼児の自発的な活動に沿っていくもの、例えば、幼児自身、自分が行った行為が、良かったのか悪かったのか考えるように促し、自ら気づくように援助することである。そしてもう一つは、幼児の思考力では思いつかないことを示していくことである。例えば、教師が他者の意見や思いに気付かせるような働きかけをしたり、幼児の視点とは異なった視点、特に他者の視点から考えるように促すことである。このような介入は、幼児の自発的な興味を喚起し、物事の特性に基づいた活動を促すことになる。

幼児たちは遊びの中で、互いに自分の考えを出し合ううちに、様々な考え方があるということを知り、それを理解した上でその考え方を受け入れたり、自分とは異なる考えでも尊重したりしながら、さらに意見を確立するという規範



意識の芽生えがなされることを可能にすることが出来るのである。これらの過程を通して、5歳児段階における規範意識の醸成といった点における役割は果たせるのではないかと考える。

5. 本指導の意義と課題

本指導の意義については、5歳児段階でのきまりに関する集団における幼児同士の相互作用、教師の支援から、集団レベルでなく、個々の幼児の意識までも考慮した指導を実践することによる規範の意識付けと考える。

本指導ではカードを取り入れることにより、幼児たちの意思表示が視覚化され、相手方に理解しやすいように、また明確に意思を伝えることの出来るように工夫した。普段の幼児の遊びの中で、つい見過ごされてしまいそうな思いや、言葉でやり過ごすといったことのないよう、また自分の意思をはっきりと伝えることが困難な幼児もこのカードを使用することによって、今の自分自身の思いを相手に伝えることが出来るのである。

また、教師による指導のポイントは、一方的に教え込むのではなく、出来るだけ幼児たちに考えさせるように支援を行い、ルールを守りながら遊びを進めていくことで、どうしたらみんなが楽しく遊べるのかを考える手助けを行うことである。

幼稚園教育要領では、他者とのやり取りだけでなく、主体的な学びの推進にあたり求められているものの一つとして、「協同性」の充実が挙げられている。ここでの「協同性」とは、「友だちと関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる」¹²とされており、本指導では、自己発揮と自己抑制の調和のとれた、つまり、自分の意見を言うとともに他者の意見を

聞くという点で、協同性を育む指導であったといえる。

今後の課題については、小学校教育への円滑な流れをしっかりと構成することが挙げられる。規範意識は、心の教育である「道徳」や、普段の「生活習慣」等の複数の要素が含まれていることから、総合的に育んでいく必要がある。幼児教育の基本は、生涯にわたる人格の基礎を形成するものであり、小学校以後の規範意識や道徳性の土台となるものである。このようなことも踏まえて異年齢交流が出来るようにして規範意識を育む指導を構想していくことが有効であると思われる。今後は小学校段階への連携を視野に入れながらの実践を計画していく。

【参考文献】

- ・中澤 潤監修 中道主人・榎本淳子編『幼児・児童の発達心理学』ナカニシヤ出版、2011年。
- ・花城由紀子「幼児の規範意識の芽生えを培うための援助の工夫～身近な人とかかわりを通して～」
<https://www.city.uruma.lg.jp/>
- ・湯浅阿貴子「幼児の規範意識の形成に関する研究の動向」『昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要』Vol.25, pp.65-83、2016年。
- ・東京都教育委員会『きまりをまもるこころを育てる一幼児期の「規範意識の芽生え」の醸成指導資料一』2014年。
- ・東京都教育委員会『子供たちの規範意識を育むために』2015年。
- ・厚生労働省編『保育所保育指針解説』フレーベル館、2018年。
- ・文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、2018年。
- ・内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館、2018年。



・R・デフリーズ／L・コールバーグ著 加藤泰彦監訳『ピアジェ理論と幼児教育の実践 モンテッソーリ、自由保育との比較研究上巻』北大路書房、1992年。

【引用文献】

¹ 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、2018年、p. 190。

² 同上、p. 60。

³ ベネッセ教育総合研究所 <https://berd.benesse.jp/jisedai/topics/>

⁴ 遊びの定義には様々あるが、その特徴には幾つか共通するものがある。例えば①喜びに満ち楽しいもので、②内発的に動機付けられ、③目的よりそれをする事自体が優位な活動である。つまり、遊びは幼児自身の内的な動機づけ（やる気）から発生した、遊ぶという目的のために自発的に行われる楽しい活動である。さらに④本気・ありのままではなく現実を虚構に置きかえる活動である。けんかごっこはあくまで「ごっこ」でなければ遊びとは言えないのである。詳しくは、中澤 潤監修 中道圭人・榎本淳子編『幼児・児童の発達心理学』ナカニシヤ出版、2011年、p. 93を参照されたい。

⁵ アメリカの伝統的な幼児教育は、child development(児童発達)、ないし、child-centered education(子ども中心の教育)と呼ばれ、教育の目標としての「発達」、中でも、情緒と社会性の発達を重視している。また教育の方法としては、教師と子どもとの信頼関係に基づいた「子ども中心」のアプローチに特徴がある。そこでは子ども中心の自由あそびや感情が重視され、教科的内容や知的教育は忌避される傾向がある。日本ではその定義がまだ曖昧であるが、いわゆる「自由保育」に相当するものであると言われている。詳し

くは、R・デフリーズ／L・コールバーグ著 加藤泰彦監訳『ピアジェ理論と幼児教育の実践 モンテッソーリ、自由保育との比較研究上巻』北大路書房、1992年、p. 71を参照。

⁶ 上杉賢士著『「ルールの教育」を問い直す 子どもの規範意識をどう育てるか』金子書房、2011年。小川博久・岩田遵子著『子どもの「居場所」を求めて 子ども集団の連帯性と規範形成』ななみ書房、2009年、p. 164。

⁷ 文部科学省『幼稚園における道徳性の芽生えを培うための事例集』2001年、p. 43。

⁸ 同上、p. 66。

⁹ 無藤 隆著『保育の学校 第2巻(5領域編)』フレーベル館、2011年、p. 33。

¹⁰ 神長美津子編著『心を育てる幼児教育—道徳性の芽生えの育成—』東洋館出版社、2004年、pp. 22-23。

¹¹ 中澤 潤監修 中道圭人・榎本淳子編『幼児・児童の発達心理学』ナカニシヤ出版、2011年、p. 102。

¹² 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、2018年、p. 58。



Teaching methods to enjoy learning rules at kindergartens

Toshie Nikaido
Akiko Gohara

Children experience social life for the first time in kindergartens. It is a significant role of kindergarten teachers to teach children the rules necessary for group life. Teachers are required to design activities and provide support to improve interactions among children. Currently, education regarding rules is provided at kindergartens based on children's developmental stages according to the guidelines for kindergarten education. In the future, development of model consciousness should be introduced through concrete and practical learning. Children learn many things by playing with other children. Playing is in itself a "learning" for children. This study examined teaching methods for enjoying the learning of rules by playing. Five-year-old children were divided into groups consisting of 4-5 members respectively and played a Karuta (a traditional Japanese card) game. Firstly, children decided the reader by themselves and tried to solve problems that happened when playing the game by themselves. In the session for reflection, children reflected not only about victory or defeat and the ranking but also about the feelings they experienced during the game and expressed these feelings in words. Children identified the feelings they experienced when they were in trouble or when feeling uncomfortable when using two cards. Simultaneously, they listened to other children's feelings and shared their feelings. After understanding each other's feelings, they considered solutions to problems and decided rules according to the situation. Teachers were required to recognize children who could consider about other children and encourage other children to archive consideration. Then, children played the Karuta game again. Teachers attempted to identify situations in which children followed the rules and praised them so that they could feel comfortable by keeping rules. Children get to know there are different ideas through playing with other children. They expressed their opinions, understood each other's opinions, accepted or respected them, and developed rules. It is suggested that children's model consciousness might develop through this process. Moreover, children could develop the ability to deal with problems by cooperating with other children. The development of model consciousness in five-year-old children might be achieved through this process.

キーワード

幼児教育 Child Education 規範意識 Model Consciousness

人間関係 The Human Relations

所属

広島文化学園大学 Hiroshima Bunka Gakuen University

学芸学部 Faculty of Arts and Science 子ども学科 Department of Childhood Studies